

ふさはしく、どこまでも浮世を茶かしたる筆勢、殆ど西鶴の壘を摩すといひつべし、六年以前にかくの如き名文世に現れある以上、月尋堂は到底剽竊の汚名を免れがたかるべし。人或はいはん、此文の彼に先だち且彼よりも妙なることは異論なし但これも亦何等か據る所あるにあらざるか、曰くさる事も絶無とは斷じがたし、されど余の鑑識を

## 茶山片影

龜井鵬齋、一日、市亭に飲みて歸るとき、街上雑沓の間に一老翁の芝字清秀のものを見て、呼びて曰く、翁は西備の菅君にあらずやと、翁曰く是なりと、因て其名を告げ、遂に其手を援て、復市樓に登つて、素懷を抒べ醉を盡して別れたと云ふ

以てすれば所謂壁書なるものは寛文以前のものに非ずして西鶴一派の俳諧的新文體の勃興以後の作と認めらるれば、敗毒散の著者を以てその原作者となさんこと不可なきに近し、それが世に愛誦せられ一篇獨立の文となさんが爲に、好事の徒によつて屢々添削改竄せられ、漸次拙劣蕪雜に陥りたるなるべし。(大正九年二月十日稿了)

文學士 西田直二郎

話がある。この事を谷文晁が、茶山鵬齋日本橋邂逅圖として書き、伊勢の河崎敬軒に與へた。敬軒は復、鵬齋に畫上の題詩を求めた。鵬齋、賦して「身是關東醉學生、公是西備茶山翁、日本橋上笑相見、共指天外芙蓉峰、都下閨傳爲奇事、便入寫

山壽圖中」。

この事は天保十一年河崎敬軒の黄葉夕陽村舎紀行の中に見えてゐるところで、西備隱士菅茶山が詩名天下に傳ふと共に、交を訂する士の多かつたこと、新知猶ほ舊友の如き詩人の風懷をよく表はしてゐるように思はれる。

茶山が備後福山の神邊に隠れ、廣瀬淡窓が豊後の日田に住してゐたことは當時天下の二隱の如く言はれた。併し海内文墨の徒が西海の往還に際し福山城外の黄葉夕陽村舎を訪ね、或は書を寄せて存問をなすものが多く、福山侯の優遇は言ふまでもなく桑名侯の松平樂翁公が其の吟詠を賜はつたことなどがある。茶山が居ながら天下の士と交ることの多かつたを知るのである。

茶山に就いては黄葉夕陽村舎詩集、花月吟、或は文稿の外に、却つて福山志料、谷間福山風俗志

室町志、常游記、大和日記などの編著のあることによつて寧ろ吾儕の興味を惹くのであるがなほ、其母が常に國史を誦して、家訓の凡ならぬこと、其門下に頼山陽外史などの出て來ることなどに於て少からず注意に値するものであらうと考へたのである。尙進んでは幕府の末世福山藩の風尙、藩侯阿部正精や、正弘の周圍に於ける藩文學の力に想到すると茶山の生涯について知りたいことが種々存するものである。

偶々廣島縣の池田奎三郎氏は茶山に關する書簡類數十通を藏せられ居る由を友人醫學士池田龍一氏より聞き、其の閲覽を願ふたが、其の送られしものを見るに、是れ茶山及其の交友の書簡類であつて、頼杏坪の作るころの「霧間の月」と云ふもの一卷、杏坪の和歌書簡一卷、などがあり、茶山と頼一家の交遊、當時諸藩の儒臣が菅太中先生と相交通してゐた一斑を知ることが出來、私にとつ

ては少からぬ興味を覺えたのである。是等書狀は茶山に宛てたものが多くあつて、茶山の交友には如何なる人のあつたか、其の交誼が如何なるものであつたか、而して其れから、茶山の生涯や又性格の一部が窺ひ得られるように思はれ、茶山の福山及び江戸に於ける生活、或は福山藩教化の上に於ける茶山の位置を了解するに尊重すべき資料であると考へたのである。

是等の中には、紫野栗山、古賀精里、同穀堂、佐藤一齋、近藤重藏、廣瀬淡窓、旭莊、伊能忠敬、大槻玄幹、立原翠軒、島原藩の儒臣岩瀬勘平、黒澤惟直其他、岡本花亭などありて、其交遊を知ることを得た。

是等書簡中茶山のものには、其塾の都講北條讓四郎に宛て、本年米作の良否を語つてゐるものがあるのは、これは茶山の塾、廉塾には茶山が特

に其塾を維持する方法として自ら得たる財を投じて田を購ひ、塾田として之に附屬せしめてあつて廉塾の經營が鞏固な基礎の上にあつた事實と考へ合すことが出来、又豊年なりとの噂ありて他國より乞食、放下師が多く入り來ること、或は塾生の二十四五人結黨して騒ぎ其一人を放逐したことなどを告げてゐる預々たる談屑の裡には、茶山塾の景況を窺ふことが出来る。或は書簡の末端に茶山の折々の詠草を書付てあるものゝ中に「ねざめしでうれしきものはわらはへがふみよむこえのきこゆなりけり」などの和歌を讀むと老詩人の黄葉夕陽村舎の曉と其心懷がしのばれて、秀麗端正な茶山の漢詩文によつて見るものよりも一層心ひかるるやう思はれるのである。

又他方、茶山に宛てた諸友の書信は、前述の如く可成いろ／＼の方面の人々を含んでゐるのである。假りに個人の上に交友から受ける影響が比較

的大なるものであるとするならば、又此の如き人々の間に自然に生起される一種の環境とも云ふべきものゝことを考へ、又それによつて促されくる知見の展開と云ふようなことを許すならば、交遊する人々と其音問は其個人を了解する上に於て種々の暗示を與へるものであらう。而して茶山に於ては、是等書狀の中から先づ注意を惹くものに伊能忠敬がある。文人詞客の翰墨の多いことはさることであるが、この測量學者の綿密な筆致で書いた書牘が西備の茶山廉塾に來ることは一寸面白いものゝやうに思はれた。而して八月二十一日とある書狀の一節には、

然ば門人左太夫儀八丈嶋其外六嶋測量無滯相濟舊冬豆州下田港迄歸着ニ付御安心被下候段被仰下御深意忝奉謝候其後伊豆駿河相州之内所々相測當月廿三日一同無難ニ歸府仕候 箱田父弟大悅之程察入候將國々測量之儀も右嶋

々にて日本沿海ハ相濟候間當時より來年中には地圖皆濟と奉存候所關東諸城下並川々奥羽三越之内相殘候城下街道等有之ニ付此節右之測量御伺ニ相成候若被仰付候得ば當六月頃之出立來三四月歸府に可相成候愚老も當子七十二歳に相成候間地圖全備取急候 扱此之者貴命之通り御面會無覺東候御保愛御長壽新與地圖御一覽被下候様所祈候

とある。伊能勘解由忠敬の手紙として珍らしいと云ふのではないが、文中にもあるやうに愚老も當子七十二と云ふ老測量家が物語としては尊重すべき文言を有つてゐる。この書狀の時は、忠敬七十二歳、文化十三年の子の年に當りて、其前年には、伊豆七嶋の測量を終り、其年また測量の一隊は、箱根蘆の湖、富士裾野、荒川筋などの測量をなした時である。忠敬已にこの古稀の齡を超えて其の畢生事業の輿地圖の全備を急げる状をよく見るこ

が出来る。それと共に西備の茶山も、已に六十九歳、忠敬は茶山の頽齡を憂ひて、保養と長壽を祈りて、新圖の完成を一覽せんことを希うてゐる。

而して尙ほ來年の計劃として奥羽三越の測量を起さんとしてゐることがこれによつて窺はれるのであるが、併し忠敬は其翌々年文政元年を以て歿してゐる。其の喪は秘せられ、既定の大日本沿海輿地全圖及輿地實測録は歿後三年に幕府に上つてゐるけれども、其樂として居た所の新圖は遂に忠敬

の生前茶山の前に展べるとが出来なかつたのである。又文中に見えてゐる箱田兄弟の大悅と云ふのは、忠敬の門人箱田眞興の父弟を指せるものであることは明かであつて、箱田眞興は、後の榎本氏でかの榎本武揚の父である。この眞興は、左大夫と稱して、備後國安那郡箱田村から出た人であるから、箱田氏と茶山との郷貫の近いことや舊誼の狀を考へることが出来る、箱田眞興が忠敬の測量

に従ひ、九州地方から、こゝに見る八丈島の測量と始終其下にあつて事に従ひ、尙ほ忠敬の歿後全圖の完成まで事に與つてゐたことを思ふと茶山と忠敬とこの箱田氏との關係をこの書狀によつて考へることが出来る。

茶山と忠敬との間の如く、又稍々風の異つた交遊の如く思はれるのは、大槻氏である。大槻氏との交誼に就いては大槻玄幹の書狀がある。

先達を御出府之趣は承知仕候得共彼是御悅にも罷出不申失敬御容恕被下度候別來益御壯健に被爲在奉恭喜候扱は明二十二日御閑暇にも候はゞ午時を御來駕被下間敷哉爾社小集御座候に付申上候家翁事も兼々拜謁仕度段吳々申居候昨日四明方へ御出之趣承知仕候薄暮過同所へ罷越候處御歸り後にて殘念奉存候翠軒は同所へ參りがけ私家にも立寄候て家翁へ面會

いたし、由に御座候私事は暮後歸宅仕候且や  
私宅は四明翁近邊雲潭書工隣家にて御座候采  
女ケ原大井土向と申所にて御座候何とも御繰  
合せ御光駕奉侍候積事御咄仕候様奉存候此段  
得貴意度態々以賤介如此御座候以上

霜月二十一日

これは茶山、江戸上府の時であらう。この書柬に於て大槻氏の蘭社小集に茶山の招請せられたことを知るのである、玄幹は言ふまでもなく磐里で、家翁とあるは父磐水である。蘭學楷梯の磐水や蘭學凡の磐里の采女ケ原の宅には隣に雲潭書伯が住んで居り、其近邊には岡山侯の儒官の四明翁、井上仲龍が居つた、四明は大東食貨志の著者で、それに茶山が交通することから、水戸藩の立原翠軒が立寄ることなどはこの一書の裡にあらはれてゐておもしろく思はれる。殊に茶山と蘭社小集こそ好い等照のやうに思はれてならない。

茶山の江戸に於ける交遊と共に其郷里に於ては頼氏の外、九州の廣瀬氏が特に親交あつたやうである。已に廣瀬淡窓の弟旭莊が茶山の廉塾にあつて其教諭を受けたので、其れに關するものには六月六日の廣瀬求馬の書簡に其入塾の初めことを思はしむるものがある、求馬は即ち淡窓で茶山老先生に宛てたる一書は「然者豚兒謙吉此節罷出候處早速拜謁被仰付且御塾留滞之儀御許容被下萬端御懇初被成下候趣感謝候御門下伺候仕候儀は小生宿願ニ候得共多病に而不果候處兒子願出候段甚小生本懷に候前書にも申上候通田舍育にて東西不辨候間何卒十分筆楚を御加へ御慈誨候様」など語の見えてゐるは謙吉即ち旭莊の入門につけて淡窓の心やりを見ること出来るのである。而して尙茶山に宛てた廣謙、又は日謙とある書狀は廣瀬謙吉又は日田の謙吉と云ふことであつて旭莊の茶山に或は在塾中の尊諭を謝するものや、暑中起居を問ふ

ものゝあるのは又これによるのであることは言ふまでもない。

又數多い書簡類の中には頼一家のもの多くあつて、特に頼氏との親交を知ることが出来る、已に頼山陽は茶山に師事し茶山先生行狀を作つたので丁度廣瀬旭莊が廉塾に茶山の慈誨を稟けたるを以て後、記茶山事を草したと同じである、殊に頼一家に於ては杏坪は茶山先生墓銘の作者であつて、其先春水、春風共に親交あつた。

春水に就いては佐渡に蘭船來り打拂ひたること十三人許打殺したことの注進あつたことゝを記してゐるものもあるが、茶山が文化元年常總の旅行の作と思はれる常陸日記についての評言して「日だち日記風俗物産且瑣々之事其時物土情かたゝ可觀よくも御記しものかな體裁より申さば江戸某佐竹系譜などの類に類にはきこへ不申候や是は注釋に被成本文にかはらぬがよからん」など云ひ又

士晦詩卷の跋文について茶山の評言を乞ふてゐるなどのものがあつて、よく其親交を窺ふことが出来る。其子の頼山陽が京都より出せる手簡には、廣島人中村瑞羊と云ふ者を紹介し、其者の爲めに尊製一紙を賜はらんことを懇願し或は京都春寒未だ去らずして雨雪時々來る正月末の、伏見の梅信を報じ、長樂寺あたり氣色を述べてゐるものがある、其他惟柔杏坪についても杏坪が海門先生に批正を仰ぎ尙ほ茶山の許に差出した「きりまの月」と云ふ一卷の擬古文體のものがあるのと又亡兄の遺稿の序文を乞ふたこと、又この惟柔の書狀には詠史として平賀義信や、武田勝頼や、惺窩先生、石川丈山、齋藤別當、木曾冠者、仲麻呂、新田左中將などを詠じてゐる和歌を載せてゐるなど餘程面白く思はれる。

其他佐藤捨藏即ち一齋が林祭酒より依囑した稿草の不着を言ひ古賀壽、柴野彦助、古賀彌助が詩

のことを云ひ梅辻勘解由、對馬儒臣岩瀬勘平、又近藤重藏などのものがあること前に言ふた如くである。近藤重藏については黄葉夕陽村舎詩に收めてある「得近藤君蝦夷書却寄五首」を思ひ起すところである。

かやうにして、さきにも述べた、如くに、茶山の交友は廣く、茶山の西備にかくれてゐたと云ふも、其見聞知見の割合に廣いものであつて、これは福山藩の氣風などを考へる上に於ても餘程注意すべきものであらうと考へたのである。

## 研究の棗

### 日本古建築研究の棗 (第二回)

工學博士 天 沼 俊 一

#### 第四 柱

柱は其斷面が(一)圓(二)正方形(三)多角形の三種ある。

(一)圓柱。古い時代の圓柱は遺物から見ると、全

長の凡そ下から三分の一位の所で最も張り出して居る。此の張り出しを「肉附」(Entasis)といふ。だから柱は徳利型で、例へば法隆寺西院伽藍の飛鳥時代の建築の柱に於て見る様なものである。此の